

以上のように A 類～D 類の類別化を行うことは、一義として、時系列的に利明の北方に関連する事績を整理されたものとして提示するところにあるが、その作業を経ることにより、幾つかの特色を次のように指摘することができる。その 1 つは、“補”を含む A 類と B 類といった 2 つのグループに顕著なように、天明・寛政・享和・文化期における利明の活動は、常に北方の様々な情報や出来事に対する関心を保持し続けながらのものであったという点である。ただし、この一貫した関心が日本国家全体の豊饒化を企図した経済政策論に具体的に組み込まれてゆくのは B-1 の『自然治道之弁』以降であり、A 類では体系性を伴う国家規模の経済理論とみなしうる業績は皆無である。この筆者の断定について、A-4『蝦夷土地開発愚存之大概』などを分析すれば、北方の開発に関する経済政策が既に提起されているのではないかと、という批判にさらされることは容易に予想される。それを見越しながらも前もって強調しておくべきは、A 類における北方開発に関する利明の発想は、あくまでも局地的特色に基づいた当地の活用に関する試案であり、B-1『自然治道之弁』以降における国家規模の経済政策論の理論的展開に含めるには無理がある、という判断であり、そうした位置づけに基づけば、A 類は B 類における経済政策論の準備にあたるアイデアが断片的に想起された業績とみなすべきである。

いま 1 つの特色は、[表 3-1] 全体からあきらかなように、A 類に属する A-1『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』が北方に関連した利明の業績としては嚆矢にあたる、という点である。ややもすれば、当然のこととして看過されるだろうこの事実を、あえて特色として示したのは、利明と北方情報との関係性が発信された年代的な上限がこの著述の成立に求められるのならば、利明と北方情報の関連性を示した胎動期を規定しうるのではないか、と展望されるからである。

4. A-1 本多利明著『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』に関する分析

前章で指摘した [表 3-1] の特色は、A-1『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』に対する分析の必要性を示唆している。したがって、本章では、[表 3-1] の端緒に位置する A-1『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』に対して検討を加え、同書の書誌学的位置づけを提示したうえで、後の B 類に位置する経済政策論へと反映された思想的特質を指摘する。なお、本章における筆者の主張は、将来的に予定される A 類全体の意義の確定化において、不可欠な役割を担うこととなる。

4-1 『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』の内容構成と成立事情

『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』の分析を進めるうえで、使用する資料についてまずは触れておきたい。同書と同名の著述は現在²⁷⁾のところ、函館市中央図書館・国立公文書

館・早稲田大学図書館に残存しているが、利明の自筆として位置づけられている刈谷市中央図書館村上文庫蔵の『交易論』（1801年〔享和1年〕7月成立）²⁸⁾ならびに『長器論』（同年8月成立）²⁹⁾の筆跡を参考とすれば、函館市中央図書館蔵の同書³⁰⁾は利明自らの記述である可能性がきわめて高い。したがって、函館本『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』に対する検討こそが、利明の思想への接近を試みる場合に最善の方法であり、本論文はその方針に則りながら展開される。

それに際して、旧来からの『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』に関する代表的な位置づけについても幾つか提示しておく必要がある。その1つは、利明研究サイドから発されたものであり、利明の著作目録を丁寧に作成した阿部真琴氏による「内容は松宮観山『蝦夷談筆記』（1710）のノート。蝦夷地の風土・風俗と1669年アイヌ反乱の記事」³¹⁾という簡潔な位置づけが最も一般化された見解である。また、北方史研究サイドからの指摘として、「本多利明の『大日本国属嶋北蝦夷風土艸稿』などというのも、この書（筆者注：『蝦夷談筆記』）の書き改めである」³²⁾という高倉新一郎氏から寄せられたものもある。これらの先学による位置づけは、松宮観山（1686-1780）著『蝦夷談筆記』（1710年〔宝永7年〕成立）の内容を利明が筆写したものが『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』である、という統一の見解として理解しうる。

ここで、阿部・高倉両氏が触れるところの松宮観山著『蝦夷談筆記』について簡潔に紹介しておきたい。榎森進氏によれば、同書は「宝永七年幕府巡見使一行に随行し松前に渡った松宮観山の著したもので、上巻にはアイヌの風俗やアイヌ語を掲載、下巻には通詞勘右衛門の体験談によるシャクシャインの蜂起の経緯を記している。蝦夷地の事情を伝えた古い文献としては新井白石の『蝦夷志』（享保五年）が有名であるが、本書はそれに先立つこと十年

27) 2012年の調査段階における残存状況である。

28) 刈谷市中央図書館村上文庫蔵『交易論』（原本請求記号：W5341／マイクロフィルム請求記号：A433）を参照した。

29) 刈谷市中央図書館村上文庫蔵『長器論』（原本請求記号：W5342／マイクロフィルム請求記号：A433）を参照した。

30) 函館市中央図書館蔵『北蝦夷の風土艸稿』（『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』の別称）〈種別：郷土／背ラベル：貴重書庫 K08ホン6003／資料番号：1810649754〉を参照した。なお、同書は国立公文書館蔵『沿海異聞』（『外国紀聞』第26冊）〈請求記号：184-0267〉所収の写本、ならびに早稲田大学図書館蔵の写本『大日本国の属嶋北蝦夷風土艸稿』（請求記号ル04 04535）が現存している。なお、阿部真琴氏によれば松平定信旧蔵書本および彰考館（水戸市）蔵本の残存が指摘されている（阿部，前掲論文(2)，89ページ）。

31) 阿部，前掲論文(2)，89ページ。

32) 高倉新一郎（1991）「蝦夷談筆記 解題」谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第4巻 探検・紀行・地誌（北辺篇）』三一書房，388ページ。

前のもので、内容も『蝦夷志』より具体的で、かつシャクシャインの蜂起の経緯を通詞勘右衛門の語りとして生々と記していることも加わって、当時蝦夷地の事情を知る貴重な文献として重宝がられたらしく、「蝦夷談話筆記」「蝦夷談話記」「蝦夷故談」「蝦夷人談筆記」「蝦夷記」「蝦夷抄略記」など、様々な異名で伝写されている。また下巻のみが「蝦夷騒動記」「蝦夷乱記事」「寛文蝦夷乱記」、さらに軍談風にアレンジした「蝦夷一撥興敗記」などの名で伝えられているものもある³³⁾と位置づけられている書物であり、別タイトルを付されながら後世へと流布³⁴⁾した松宮観山による蝦夷地関連情報の聞き書き、といった理解が適切である。成立年月についてさらに詳述すれば、1802年(享和2年)ごろの写本とみられる『蝦夷談筆記』に

「右松前の通詞勘右衛門口上の通少も無相違書留申候

宝永七年寅七月記于松前寓居

東野 菅俊仍縄甫³⁵⁾

33) 榎森進(1997)『増補改訂 北海道近世史の研究』北海道出版企画センター、141ページ。榎森氏の記すところの“シャクシャインの蜂起”とは、海保嶺夫氏による「シャクシャインの戦いは、寛文九年(1669)六月、シブチャリ(現在の北海道日高支庁管内静内町)に本拠を置くメナシクルの「惣大将」シャクシャインが指導者となって起したアイヌ民族の松前藩への軍事対決で、彼自身は同年十月に松前藩に謀殺されるが、対立状況の解消は満三年後の同十二年七月に及んだ。(中略)幕藩制国家固有の軍事機構の発動をみたこの戦いは、単に幕藩制の最北藩と蝦夷地の有力首長との対立にとどまらず、幕藩制国家とアイヌ社会との構造的な対決という性格を根底に持つものであった」(海保嶺夫(1984)『近世蝦夷地成立史の研究』三一書房、284ページ)という解説の通りである。なお、「シャクシャインの乱は、幕藩制下にあっては「蝦夷蜂起」と称された(『津軽一統志』にこのように表現されている)事件であった」(長谷川成一(1982)「東北諸大名と蝦夷地—北奥羽大名との関りを中心に—」高倉新一郎監修 海保嶺夫編『北海道の研究 第4巻 近世篇Ⅱ』清文堂、74-75ページ)と指摘されている。補足として、蝦夷蜂起をめぐる諸藩の情報収集活動と、その後の蝦夷・蝦夷地に関する認識の形成について検討を試みた浅倉有子氏の論説(浅倉有子(1990)「蝦夷認識の形成—とくに契機としての情報をめぐって—」北海道・東北史研究会編『北からの日本史 2』三省堂、126-151ページ)や、『蝦夷談筆記』に対する検討を加えながらアイヌ語の言語的特徴に着目した佐藤知己氏の研究(佐藤知己(2009)「18世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について」[北海道大学『北海道大学文学研究科紀要』127号]、29-58ページ)は、『蝦夷談筆記』の資料的価値の多様性を看取するうえで、示唆に富む。

34) 榎森氏が触れるところの『蝦夷記』上巻・下巻は北海道大学附属図書館北方資料室に〈請求記号：旧記0044(北大北方資料室)〉、また、『蝦夷抄略記』は北海道大学附属図書館北方資料室に〈請求記号：旧記0103(北大北方資料室)〉所蔵されている。なお、1795年(寛政7年)に書写されたアイヌ語彙集『蝦夷記』についての佐藤知己氏の分析(佐藤知己(2003)「酒田市立光丘文庫所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について」[北海道大学『北海道大学文学研究科紀要』第111号]、95-118ページ)は、『蝦夷談筆記』との関連性に着目したものではないが、アイヌ通詞から発せられた情報の流布状況を知るうえで、示唆に富む。

35) 北海道大学附属図書館北方資料室蔵『蝦夷談筆記』〈請求記号：旧記0127(北大北方資料室)〉を

表 4-1 『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』と『蝦夷談筆記』の比較対照表

本多利明著『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』		松宮観山著『蝦夷談筆記』	
利明 1	蝦夷地の観察記録45点の一つ書き	観山 1	蝦夷地の観察記録45点の一つ書き
利明 2	「蝦夷地之産物」21種の紹介	観山 2	「蝦夷地産物」23種の紹介
利明 3	「蝦夷人詞遣ひ品々」164語の紹介	観山 3	「蝦夷言葉」104語の紹介
利明 4	「蝦夷地濫觴之事」	観山 4	「松前家系」1代～10代を列記
利明 5	「シヤムシヤイン一揆之事」	観山 5	「シヤムシヤイン一揆の事」
利明 6	「松前氏系図」1代～10代を列記	観山 6	「蝦夷之図」
利明 7	「独言」	観山 7	「蝦夷ノ旧主安東氏」

(出所) 函館本『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』³⁶⁾・北海道大学附属図書館北方資料室蔵『蝦夷記』³⁷⁾により作成。

と記載されているところから、松宮観山が1710年(宝永7年)の7月に脱稿した著述として長らく受けとめられていたことがわかる。

このような同書の成立事情についての理解を念頭に置きながら、まずは、本多利明著『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』と松宮観山著『蝦夷談筆記』の関係性が両氏の指摘通りなのか否かという点について確認しておきたい。その作業は両書の内容を比較した対照表である[表 4-1 『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』と『蝦夷談筆記』の比較対照表](以下、[表 4-1]と略記する)に基づきながら進めてゆく。

左側に利明の著述を項目ごとに順次配列し、右側に観山の聞き書きを同様に配した[表 4-1]から抽出しうる特徴を示せば、まず1点目として、“利明1”～“利明6”と“観山1”～“観山5”は若干の数値的差異や順序の異動が見受けられはするものの、各項目は同様の趣旨のもとで展開されている点を挙げることができる。その場合、“利明4”と“利明5”

参照した。高倉新一郎氏の「松宮観山は菅原氏、名を俊仍といい、縄甫と号した」(高倉、前掲論文、388ページ)という紹介文や、前田勉氏による「松宮観山、名は俊仍、字は旧貫、観山はその号である。また観梅道人とも号した」(前田勉(1990)「松宮観山の思想とその影響—附 翻刻 宮城県図書館青柳文庫蔵『閑窓随筆』—」東北大学附属図書館編『『東北大学附属図書館研究年報』第23号』、1ページ)という指摘によれば、「菅俊仍縄甫」という記名は松宮観山を意味することとなる。なお、松宮観山については、小糸夏治郎氏の解説(小糸夏治郎(1935)「松宮観山について」国民精神文化研究所編『松宮観山集 第1巻』国民精神文化研究所、1-16ページ)も有用である。

36) 函館本『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』(全52丁)の内容構成を分量に着目しながら示すと、次の通りとなる。題目「大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿」(1丁表)、“利明1”(1丁表-19丁表)、“利明2”(20丁表-20丁裏)、“利明3”(20丁裏-22丁裏)、“利明4”(23丁表-24丁裏)、“利明5”(25丁表-48丁裏)、“利明6”(49丁表-50丁裏)、“利明7”(51丁表-52丁裏)。

37) 北海道大学附属図書館北方資料室蔵『蝦夷記』(請求記号:旧記0044(北大北方資料室))は『蝦夷談筆記』の別称本である。

を併せたものが“観山5”に該当していることを補足しておかなければならない。また、“観山6”ならびに“観山7”は利明の著述には掲載されず、その一方で、“利明7”が観山の聞き書きには見られない点が2つ目である。

こうした各項目についての特徴とは別途に、内容面の比較に関しても言及しておきたい。例えば、“利明1”と“観山1”に該当する45点の一つ書き³⁸⁾の冒頭部分を、

〈本多利明著『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』〉

- 「一 蝦夷地山多くして平地少なく人家皆海辺に有之魚猟を業とし耕作は不致也
 一 蝦夷地と松前領との堺は無之候
 一 蝦夷西在郷田沢乙部東在郷チイナイシコナイ茂通川富川へケレ地等皆日本人と交り候蝦夷にて有之也
 一 シヤモ〔驢^ノ〕の中に交り住居する事を好み不申次第の蝦夷地へ引込近年は漸々少くなり田沢乙部杯の蝦夷は多くは疱瘡疹にて死去して近年は人数少くなりたり」³⁹⁾

〈松宮観山著『蝦夷談筆記』〉

- 「一 蝦夷の地山多して平地少く人家皆海辺に有之魚猟を生業といたし耕作等は且て不致也
 一 蝦夷地と松前との境の儀しかと限は無之候
 一 蝦夷西在郷 田沢 乙部
 一 同 東在郷 ちごない しゃつかり 茂通川
 富川 へけれ地
 右之分皆日本人と入交り蝦夷人居住仕候しゃも〔驢^ノ〕の中に交り住居致候事好不申候哉次第に蝦夷地へ引入候て近年は少く罷成候田沢 乙部などの蝦夷は多くは疱瘡疹にて死亡致し大形は絶候也」⁴⁰⁾

と並置してみると、双方ともに文意がほぼ同じであることがわかる。ただし、観山による「松前との境」という表現が、利明においては「松前領との堺」とされ、表記の修正などの

38) なお、本論文の末尾に【付録】として〔表-1 本多利明著『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』における45点の一つ書き(抄)〕を添付した。これは、“利明1”に該当する“蝦夷地の観察記録45点の一つ書き”を翻刻化し、断片的に一覧化したものである。『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』の内容理解のみならず、『蝦夷談筆記』との比較において参考としてもらいたい。

39) 函館本『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』1丁表-1丁裏。

40) 北海道大学附属図書館北方資料室蔵『蝦夷記』〈請求記号：旧記0044(北大北方資料室)〉。